

Die Eiche

ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

ボトルシップ研究会活動

-「エーリッヒ・カウルの日記」を翻訳する会-

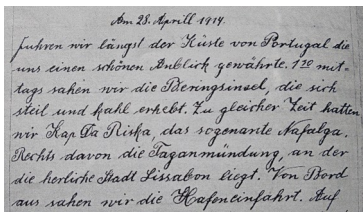
ボトルシップ研究会主催の『「エーリッヒ・カウルの日記」を翻訳する会』が今年1月に始動して約2か月が経ちます。第一及び第三金曜日の午後1時に勉強会を開催しており、宗宮好和名誉会長を含む8名でスタートしました。

翻訳作業はだいたい次のような流れで進んでいます。事前に決められた担当の独文をそれぞれが翻訳し、期日までに訳文を宗宮先生へメールで送ります。勉強会当日には担当者が独文を音読しながら訳文を発表し、宗宮先生のコメントを交えて皆で内容を確認します。勉強会後担当者が修正した訳文を全員へメールで送り、内容を共有しています。



日記を通してカウルの人柄もメンバーで議論

日記は分厚い一冊の日本製のノートに、とてもきれいな筆記体で書かれています。その内容は、エーリッヒ・カウルが1891年にベルリン郊外のフルステンヴァルデで生まれ、国民学校、機械工の徒弟を経て1909年からのベルリンでの職業遍歴時代、1914年の海軍入隊、チンタオでの日独戦と敗北、日本における俘虜収容生活、1919年の解放、1920年の帰国から成り立っています。彼がこの一冊に書き始めたのは「1915年東京にて」とあります。それまでの出来事については思い出しながら、またはメモをとってあり、それを見ながら書いたようです。



エーリッヒ・カウルの日記の直筆

エーリッヒ・カウルは就職してから、特に海軍へ入隊してからは、時刻や場所、どんな訓練をしたかなどを具体的に記録しています。第一次世界大戦が勃発する前に工機団の一員としてチンタオに向けて航海がはじまると、輸送船の概要はもちろん、移動しながら船から見える風景の描写や寄港地での体験などを表現力豊かに細かく伝えています。勉強会では彼の人物像についても話し合いましたが、好奇心旺盛、向学心がある、観察眼がある、感情豊か等の意見が出てきました。器用に何でもこなすまじめなその人柄に大変魅力を感じています。

時代背景を十分に理解しないと的確な訳文が見つからないことや、一つ一つの単語が持つ意味などを改めて実感します。先生はじめ、参加者みなさんの意見や経験談等が大変勉強になり、とても有意義な時間を過ごしています。まだ翻訳は1914年5月の段階（3月末時点）ですが、今秋完成を目指して奮闘中です。

『「エーリッヒ・カウルの日記」を翻訳する会』では引き続き参加者を募集しています。また今後週末にも定期的に勉強会を開催する予定なので、平日勉強会に参加するのが難しい方も是非一緒に日記の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

(理事・青壮年部・編集委員：本橋 緑)

青壮年部活動

-今後の活動見通し-

青壮年部は、昨年5月の総会の折、金谷会長より組織の若返りと活性化を図ることを目的に新設を提案、了承された組織となります。メンバーは、10名で構成されています。

組織の活性化とは言っても、これまでの協会活動について否定的にとらえているわけではありません。換言すると、活動の多様化という考え方がより適切なのではと捉えています。そして活動の多様化により、新規会員の増員を図るという点がこの組織の目的になるのではと思っています。特に若手会員の増員するような協会活動を展開することにより、次の世代の協会の組織を維持することが重要な役割と捉えています。



青壮年部 部長 勝見 浩明

上記目的の下、これまで2回の部会を行い、千葉県日独協会におかれている課題の検討を行いました。メンバーの共通認識として「ドイツ人との交流が少ない」という点が挙げられました。ドイツ人との交流が実際にできるような機会を提供できるイベントを徐々に増やしていくことが必要であると思っています。

今年は、活動のテーマとして大きく、二つに分けて活動しようと思っています。一つは、イベント活動での多様性を追求する予定です。今秋、ドイツ大使館主催の「ドイツフェスティバル」の見学や、来春に向けてのミニ遠足的なイベントの企画選定も始動しました。

講演についてもこれから調整を本格的に行いますが、在独歴が長い方の講演会や、日独協会に在籍されているメンバーの方による講演、ドイツ語にテーマを当てた講演なども実施に向けて検討を加速化したいと思っています。

同時にこの協会の会員であることでより多くのドイツに関する現地の情報を日常的に聞いたり、読んだりすることができる機会を多く得ることを念頭に置き、昨年2月より、Facebookに「千葉県日独協会ドイツ情報 会員専用」のページを設け、ほぼ毎日ARDやZDFのドイツニュースの共有、ドイツに関する様々な分野の現地の記事をアップして共有を始めています。掲示板的な情報共有ですが、ドイツでは、今、何が話題になっているのか、国内の報道では得られない情報が日常的にアップされているものと思っています。関心おありの方は、勝見までご一報ください*。

最後に青壮年部と言っても年齢で活動を制限しているわけではありません。企画実行するのが青壮年部であり、会員の皆様には、どなたにも参加できるイベントを考え、また、ドイツに関心を持たれる多くの会員の皆様にも接点を広げてともに活動したいと思っています。これまでのご専門の領域でドイツについて深い専門性を有しておられる皆様とも交流を深めていけたら良いと思っています。会員諸賢の皆様のご指導よろしくお願い致します。

* 勝見 mail: siegmund2017@outlook.com

北ドイツの街紹介

-青壮年部 竹内 優さんレポート-

今回の北ドイツ旅は、ブレーメン→キール→シュヴェリーン→ハンブルクという順番で、最初の3都市には1日ずつ、ハンブルクのみ2日間滞在しました。

ブレーメンでは、念願のブレーメンの音楽隊の銅像を観ることができました。市庁舎の横にあり、思ったよりも目立たないところにあるな…という印象を受けました。像の一番下のロバの前足を撫でると願い事が叶うと言われているため、足の部分だけ金色に輝いていました。旧市街には Schnoorviertel という、小さな雑貨屋さんやカフェなどが並んでとても可愛い地区もありました。

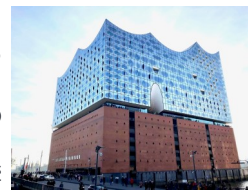


2日目のキールは、残念ながらシーズンオフだったため他の3都市に比べて街を堪能することはできませんでした。毎年春の終わり頃（今年は6月22日～30日）に Kieler Woche というイベントが開催され、街は活気に溢れるようです。かなり大きなお祭りで、街中の至る所で様々な催しが行われます。

3日目はシュヴェリーン城を観に行きました。以前NHKの旅するドイツ語でこの城を目にしてから、ぜひ自分の目で見てみたいと思っていました。とても美しい佇まいのシュヴェリーン城はシュヴェリーン湖の島の上に建てられており、この城の中にメクレンブルク＝フォアポンメルン州の議会も設置されています。2015年からは世界遺産の暫定リストに記載されているそうです。



ハンブルクには2日間滞在したので、主要な観光スポット訪問以外に遊覧船にも乗り、ハンブルクならではの景色を楽しむことが出来ました。ハンブルクでおすすめしたいのは、2017年にオープンしたNDRエルプフィルハーモニー管弦楽団の新たな本拠地でもあるコンサートホールのエルプフィルハーモニー・ハンブルクです。コンサートのチケットが無かったためホールには残念ながら入ることはできませんでしたが、このホールは日本人の音響設計家も建設に関わったようで、音響が非常に良くまた近代的なデザインでも注目を集めています。実はこのエルプフィルハーモニーの中には無料の展望台があり、ホールには入れなくても建物の中に入ることができ、街を一望することが出来ます。



もう一つハンブルクで印象的だったのは倉庫街にあるミニチュアワンダーランドです。ここはヨーロッパを中心とした世界中の街並みをジオラマと鉄道模型で再現したテーマパークで、その精巧さと完成度には圧倒されました。2017年度には、ドイツ観光局が発表したドイツの人気観光スポットの第一位に選ばれたそうです（ちなみにその年の2位はヨーロッパパーク、3位はノイシュヴァンシュタイン城でした）。



今回の旅中に“Moin”（または“Moin Moin”）という挨拶を多く耳にしたり、南ドイツではほとんどない魚料理を見かけたりしたことで、北ドイツにいる実感が湧きました。ドイツの新たな一面を知ることが出来て良かったです。

ベルリンの発展経緯

-日独協会主催講義に出席して-



3月9日に開催された日独協会主催のドイツ語圏文化セミナー“Auf den Spuren des alten Berlins”（ベルリンにある歴史の足跡）に参加。講師は、Riesner氏でこれまで幾度となく、彼の講義に出席しています（プロフィールは、Die Eiche No.114に掲載）。

講義内容は、ベルリンの発展に大きく寄与した人物、18世紀の国王（ヴィルヘルムI世、ヴィルヘルムII世等）、20世紀の建築家ブルーノ・タウト、そして大戦後の冷戦の影響、東独の施策にフォーカスして講義が行われました。

初代王-フリードリヒI世の統治スタイル

1701-1713

- プロイセンにおける王
 - König in Preußen
 - スペイン継承戦争でハプスブルクに味方を約束
- シュプレー河畔のアテネ
 - シャロットテンブルク宮殿建設
 - ベルリン学術協会設立
 - 侯妃優秀、ライプニッツ学説精通、英仏伊堪能
- 破産状態
 - 衣類、料理、菓子職経費

1701: 5,000万→1708: 1億7,000万



加冕式 Königsberg, 18. Jan. 1701



東人王がロシアに贈った装束の図

軍人王-フリードリヒ ヴィルヘルムI世の統治スタイル

1713-1740

- 緊縮財政
 - 従来の年間予算27万ターラーを80%圧縮
 - 宮廷スタッフ大幅合理化、宮廷儀式簡素化
 - 24以上の贈答品、レンタルもしくは、売却
- 軍力強化（欧州第4位）
 - 軍制国有化（常備兵82,000）、巨人連隊組織
 - 同一歩調の導入
 - 庭園を練兵場に改造
- 粗糲、癪癪持ち、細かい
 - 指令が徹底されるか現場視察
- 宗教的寛容
 - フランスユグノーの受入れ、2万人の宗教迫害難民受入れ
 - 能力ある外国人を高いポストに起用

ロシア一行が自衛隊を通過する際、献金金は、6,000ターラー以内にせよ。世間的には、3万から4万ターラーかけたと思わせた。

収入より支出は多くなる

借金は駄目。文官、軍人の給与支払は遅らすな

舞劇、オペラ、仮面舞踏会禁止（1715）

1時間の遅刻は、300万円の罰金

射的大会禁止（1727）



千葉県日独協会 旅行勉強会 7/4/18 資料より抜粋

-1740)は、軍隊による国力増強で有名ですが、ペスト患者のための隔離施設としてシャリテを設立、その後陸軍病院として使用、現在でも欧州最大の大学病院として利用されているとのことでした。当時の施設が現役で利用されているのは、驚きました。

1734年、市街地の拡大の必要性和同時にそれまで城郭として要塞の軍事的価値の低下から、要塞の廃止が命じられ、その代わり、18の税関門が設置、その一つがブランデンブルク門になったとのことでした。門の外側は、ベルリンではなく、ティアガルテンなどは、ベルリン外であった点は、興味深かったです。また、ブランデンブルク門の上部に設置されている四頭立ての馬車（クヴァトリガ）は、ナポレオンとの闘いで敗れた際、戦利品として持ち去られ、再び戻った話、東独時代、修復した際、西側でこの馬車の修理を行ったものの、ヴィクトリアの持つ杖の先が軍国主義であるとのことと外された経緯があったなど歴史的経緯は新鮮でした。1895年ヴィルヘルムII世の命で建築されたブランデンブルク門近辺の“Siegessäle”（勝利の道）は、戦後、破壊されて今は存在していませんが、当時の文化の香りを感じることのできる素敵な場所であったのであろうと、往年のベルリンの良き時代に思いをはせました。

キャンパスレポート

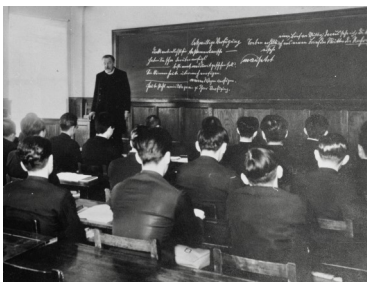
-上智大学文学部ドイツ文学科-

上智大学とドイツの関わりは非常に深く、初代学長は、ヘルマン・ホフマンというドイツ人でした。校地の取得や設置認可のための文部省との交渉など、開学のために尽力されました。また、上智大学は、ドイツのカトリック教会から財政的な支援を仰いでいたこともあって、開学においてドイツとの関係は、深い関係があります。

ホフマン初代学長は、熱のこもったドイツ語等の授業を行っていたという記録があります。私の所属しているドイツ文学科は、大学開学当時から設置されていたので、学科の授業においてもホフマン初代学長は教鞭をとっていたと思われる。ホフマン初代学長の教え子によると、彼は入学する学生一人ひとりの顔と名前を受験票の写真と照合して、最初の授業までに覚えていたそうです。ホフマン初代学長の同僚だったヨハネス・ラウレス神父の著作『ホフマン先生のおもいで』には、当時の様子として、学生に宿題を多く出し、提出させたノートはきちんと訂正して返却。講義では学生を名指して質問をあげ、熱の入ったドイツ語の授業と教授との親しい関わりを上智の校風として味わったということです。このような伝統は、現在も強く引き継がれていると言うことができます。彼と同じ方法で現在の教授も学生の名前と顔を覚えておられます。また講義では、ほぼ毎回教授から名指しされ質問に対して答えています。ある講義では、ドイツ語から日本語に翻訳した文章の添削をしてもらうために毎回ノートを提出し、赤ペンで抜けのない訂正をしてくださっていました。ホフマン初代学長の熱のこもった講義方法は、今も脈々と受け継がれているということができ、ドイツと日本の架け橋になったホフマン初代学長のDNAはドイツ文学科の講義において受け継がれ発展していくのだらうと思われます。



ホフマン初代学長
写真提供 上智大学史資料室



ホフマン学長の授業風景-1号館
写真提供 上智大学史資料室



キャンパス風景 1号館

大学の最初の2年間はドイツ語の文章を正しく理解するために直訳（逐語訳）に徹するよう指導されました。ドイツ語の児童文学では、逐語訳に慣れた私にとって、子供がわかるような単純明快な訳、また子供の情緒を伸ばすような言葉選びや訳作りに最初は戸惑いました。しかし講義の回数を経ていくごとに、脳内で登場人物達の話し方や性格をイメージして子供向けの翻訳ができるようになりました。講師は、ドイツ文学科の卒業生なので、私の先輩にあたる方ですが、卒業生の中にドイツの文学者として有名なミハエル・エンデの奥さんもいることを知りました。そのような素晴らしい卒業生も輩出した学科において、私自身も残りの1年間更に勉学に励みたいと思っています。（青壮年部：大田黒 訓子）

ドイツ語との出会い



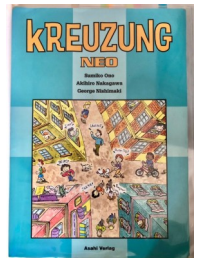
ドイツと私

ドイツと私 -竹内 優

ハイデルベルク大学に交換留学中の竹内です。ドイツ語と出会ったのは、高校2年次の第二外国語の授業でした。当初はパリのお洒落な街並みとフランス語の美しさに憧れ、フランス語を選ぶつもりでしたが、希望者が多いことが判明し、親友と一緒にドイツ語を選ぶと誘われたのがきっかけでドイツ語を選択することに決めました。

その後のドイツ語の授業は全てが新鮮で、驚きの連続でした。週一回の授業の他にNHKドイツ語講座や独検、全国高校生ドイツ語スピーチコンテストにも挑戦し、いつの間にかドイツ語に没頭していました。今まで何をやっても中途半端でしたが、ドイツ語は初めて本気で取り組みたいと思えるものでした。お世話になったドイツ人の先生と誘ってくれた友達にいつか恩返しをするために、高校卒業時「日本とドイツの架け橋になるために通訳者が翻訳者になる」という目標を立てました。

卒業後は獨協大学のドイツ語学科に進学し、ドイツ語会話研究会にも所属しました。ハイデルベルク大学の修士課程で日独通訳を学べることを知って以降何としてでも留学をしたいと思っていましたが、念願叶ってハイデルベルク大学へ留学することが出来ました。初めてのドイツだったので最初は苦労しましたが、最終的にとても楽しい留学生活を送ることができました。さらに語学学校とBio製品を扱うお店で約2ヶ月インターンをし、ドイツの仕事の世界を垣間見ることも出来ました。帰国後は都内のドイツ料理屋でアルバイトも経験し、日本のお客様にドイツへ興味を持ってもらったり、ドイツ語圏からのお客様に日本のことを知ってもらったりしたのが大きな喜びでした。



高校時代の独語の教科書



インターン時代の職場の同僚

獨協大学大学院に進学後、大学外で行った翻訳や通訳で最も心に残っているのが日独スポーツ少年団同時交流での通訳です。2週間ドイツスポーツ少年団のグループ通訳として帯同し、各地の青少年との交流や日本のスポーツ及び文化体験をしました。最後に団員や各地方都市の担当者、団員のホストファミリーの方々から感謝された時は達成感でいっぱいでした。昨年9月からはハイデルベルク大学に2度目の交換留学中で、日独英の通訳の授業を中心に履修しています。語学力不足で日々悪戦苦闘していますが、ずっと勉強したかったことなのでこうして学べていることだけでも夢のようです。どんなに遅くなってもいいのでいつか日本とドイツの架け橋のような存在になれるように、これからも頑張ります。（青壮年部：竹内 優）



日独スポーツ少年団同時交流時の通訳

書籍/Buch

元NHKワシントン支局勤務で29年前からミュンヘン市に在住の著者が、「ドイツ人はなぜ、年290万円でも生活が豊かなのか」と題して、政治、経済、社会の現実を具体的に示しています。お金の換算できない豊かさ、便利さは豊かさの裏返し、お互いサービスを求めすぎない、新しい価値は自由時間、お金をかけずに生活を楽しむ、リサイクルで分かち合う、その他、ドイツ人の生活の豊かさが伝わってきます。日本の社会では肯定することができない面もありますが、ドイツ人の生き方、社会の仕組みを知ることです。熊谷 徹著 青春出版社刊- ¥994- アマゾン (理事・編集委員: 志賀 久徳)



活動報告

■トールペインティング教室/青壮年部主催

3月3日(日)に船橋市中央公民館でトールペインティング教室を開催しました。テーマは「Bauern-MalereiでOstern(イースター)プレートを描いてみましょう」。トールペインティングには様々な画法がありますが、これはBauern-Malerei(直訳すると農民の画法)といって、ドイツ語圏の民族工芸をベースに発展させたペインティングです。

今回青壮年部の活動の一環として企画しましたが、当協会では2005年に「ドイツにおける日本年」行事の一つとしてトールペインティング教室を開催しています。

さて当日ですが冷たい雨が降る中、講師の西川珠子先生、助手の山崎真由美さん、参加者13名(定員)、筆者、また金谷会長が会計兼カメラマンとして参加して下さり、総勢17名が集まりました。

はじめに先生が緑色の絵具を使い、葉っぱの描き方をデモンストレーションします。それから各自が筆を握り紙に練習、そして実際に下書きしてある木のプレートに描きます。最初はとても緊張して筆の動きがぎこちなく、時間をかけながら小さくさまざまな形の葉っぱを描きました。次は白のマーガレットです。再び先生のお手本を見てから、それぞれマーガレットを塗っていきます。この辺りから皆さんだんだんと筆使いに慣れてきて、かわいらしい白のお花が次々と出来てきました。その次は黄色のチューリップ。先生方も驚きのスピードで可憐な黄色いチューリップが現れてきます。このように色ごとに先生から教わりながら実際に



今回のデザイン



先生のお手本を見ている様子



集中して描いている様子



先生のお手本を見ている様子



先生(最前列右から4番目)と山崎さん(同右から3番目)を囲んで

プレートに描いていきました。徐々にプレート上の色彩が増え、本当に花が咲いていくように華やかになっていきます。各々のペースで卵、バラと描いていき、最後に文字に色を入れて3時間ほどで遂に完成しました。

参加者のほとんどが初心者でしたが、皆さんの個性あふれるとても素敵な作品に先生方も大満足でした。

段取り的には反省点が多々ありましたが、次回以降の教室に活かしたいと思います。少人数ならではの和やかな雰囲気の中、短時間で一つの作品を作り上げることができ、大変達成感のあるワークショップになりました。(理事・青壮年部・編集委員: 本橋 緑)

講師紹介

・西川珠子先生: 1994年~96年デュッセルドルフ滞時にBauern-Malereiを習い、帰国後講師の資格をとり1999年から自宅で教室「アトリエBella Art」を開いています。

・助手の山崎真由美さん: 2002年からアトリエBella Artに通い、2005年当協会主催のトールペインティング教室に西川先生と一緒に生徒として参加しています。

今後の予定

4月19日-20日 全国日独協会連合会総会(新潟)

5月11日 年次総会 時間: 15:30-16:30

場所: 船橋市宮本公民館 第1+第2集会室

記念講演会 時間: 16:40-17:40

内容: 「歯の噛み合わせと健康について」

= 加藤歯科医院の症例より =

元当協会理事 加藤和子氏

懇親会 時間: 18:00-

場所: 木曽路船橋店

船橋市宮本町 2-12-15

5月25日 デュッセルドルフ “Japantag” 千葉県との姉妹都市調印式に同行。当協会から金谷会長、橋口名誉会員が参加予定

会員情報

新人会員 秋草 史幸 習志野市

中村 孝子 八千代市

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人 清和会、

(株) 京葉ビル管理、(株) 和幸電気工事、

メルセデス・ベンツ日本 (株) 習志野事業所

編集後記

何世代に渡るプロイセン王が、ベルリンをロンドン、パリ、ローマに比しても文化的にもレベルの高さを示すために数々の建築物を建造し、ベルリンの文化的な位置づけをアピールしたのは、興味深い。ベルリン大聖堂、ベルリン王宮、国会議事堂など、それぞれドームを持つが、それらが当時の権力の象徴であったということも初めて知った。産業が勃興し、多くの労働者の流入でブルーノ・タウトの設計に基づく、労働者向け住居は、現代でも通用するデザインであり、実際、多くの建物が今でも使われている点は、素晴らしい。同時にベルリンには、常に新しくベルリンに人々が流入する機会があり、古くは、ユグノーから東欧からの労働者、戦後は、トルコなど外国人労働者の流入で常に他の民族との交流で新たな文化的潮流を生み出す都市として目を離すことができない。今後、ベルリン以外にもドイツ各都市にまつわる歴史的経緯について今後も取り上げてみたい。勝見 浩明